

「あなたがたに平和があるように」

東八幡キリスト教会の奥田知志牧師は子どもたちに向けた説教の中で、2016年に「津久井やまゆり園」で起きた事件を引き合いに出しながら、『敵のいのちは殺せ』、『味方のいのちは大事』。これが戦争です。」と定義しています。そして、「戦争は『殺していいのち』があることを前提で進められます。しかし、そうでしょうか。殺されていいのちなど本当にあるのでしょうか」と続けます。

神が約束されたカナンの地を前にして、モーセは神に命じられたとおりに偵察隊を派遣します(民数記 13:1-2)。帰ってきた偵察隊は、「そこは確かに乳と蜜の流れる地だった」と報告するのですが、「攻め上げるべきだ」と主張する者、「そんなことはできない」と主張する者に二分してしまいます。そればかりか、「私たちがそこで見た民は皆、巨人だった」(民数記 13:32)と言う者さえ現れます。「頼ることのできる力は、目に見える自分の力だけだ」というのが、彼らの主張の前提にあります。そして、非常に残念なことに、「行くべき」「やめるべき」というどちらの主張も「神が戦争を肯定しておられる」という前提に立っています。彼らは、「殺していいのち」があると思っているのです。

イエスを目の前にした祭司長たちもまた、同じように思っていました。彼らにとってイエスの存在は、危険と恐怖の対象でしかありません。だから、イエスを強制的に排除することによって、安心を得ようとしたのです。彼らにとってイエスのいのちもまた、「殺していいのち」でした。

もちろんそれは、イエスの弟子たちも無縁ではありません。イエスが逮捕される場面で、「そばに立っていた者の一人が、剣を抜いて大祭司の僕に打ちかかり、片方の耳を切り落とした」(マルコによる福音書 14:47)のは、イエスのいのちを守るためという大義名分はあったにせよ、やはり「殺していいのち」があると思っていたからでしょう。その前提の下に、弟子たちはイエスの十字架を前にして、「自分たちのいのちもまた『殺していいのち』だと思われているに違いない」と逃げ出したのです。

「その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちは、ユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸にはみな鍵をかけていた」(ヨハネによる福音書 20:19)のもそのためでした。「そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた」(ヨハネによる福音書 20:19)。この「あなたがた」には当然、イエスの弟子たちが含まれています。弟子たちは復活されたイエスの姿を見て、「もう怯える必要は無い」と安心したことでしょう。もしかしたら、「これで自分たちのいのちを狙っている連中に逆襲できるかもしれない」と思ったかもしれません。

しかし、イエスの視点はひとり弟子たちに留まるものではありません。イエスは、「主は恵みに満ち、憐れみ深く／怒りに遅く、慈しみに富む方」(詩編 145:8)であることをよくご存じです。そして、いのちについて「私は誰の死をも喜ばない」(エゼキエル書 18:32)とされていることをご存じです。それゆえ、「あなたがた」には、弟子たちばかりでなく、イエスを殺そうとした人々、また、実際に殺してしまった人々も含まれています。イエスには、また神には、「死んでいいのち」などないのです。

モーセの時代から数千年を経ても、イエスの時代から二千年を経ても、人間は全く進歩していません。人間が勝手に「意味があるいのち」と「意味のないいのち」を区別し、「殺していい敵のいのち」と「大切な味方のいのち」があると言っています。いのちを分け隔てし、差別し、世界や人々が分断されてしまっています。2019年、教皇フランシスコは長崎・爆心地公園でのスピーチで、「わたしたちの世界は、倒錯した二分法の中にあります。それは、恐怖と不信の心理から支持された偽りの安全保障を基盤とした安定と平和を、擁護し確保しようとするもので、最終的には人と人との関係を毒し、可能なはずの対話を阻んでしまうものです」と述べました。「目に見える力で相手を圧倒することが平和だ」と嘯く人々が、「目に見えない対話による」真の平和を阻害している、と。

「見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に存続する」(コリントの信徒への手紙二 4:18)。「いのち」を分け隔てすることなく、全てのいのちが大切にされる世界のために、平和のために対話し続けるしかありません。今日がその始まりの日となるように祈り願います。

